

関西学院大学から 世界へ

World Citizen
奉仕のための練達
Mastery for Service

関西学院大学は、世界を視野におさめ、他者への思いやりの気持ちを持ち
社会の革新に挑む人材の育成を使命としています。

国連職員インタビュー特集
○卒業生インタビュー

世界をより良くするために、自らを鍛え、使命を果たす



Maiko Togeaki 田頭 麻樹子さん
国連事務総長経済社会司(UNEP)
社会政策開発部 社会政策課長
1980年 文学部卒業

今後も持続可能な開発を根付かせるために
尽力していきたい。

1998年夏、アムステルダムで開催された世界社会開発サミットにおいて、冷戦終結後に進展するグローバル化への対応として雇用創出・貧困撲滅、すべての人が社会参加できる社会的統合という本柱が提言されました。私の国連社会政策開発部ではその進捗状況を報告してきました。他にも、社会的に弱い立場にいるソーシヤルグループ、特に青年高齢者身体障害者先住民民族所得者をサポートする政策およびプログラム支援アドボカシー権利推進、そして、社会的弱者も政策過程に参加できるように提言しています。最近では格差の是正、気候変動・環境劣化への対応

などを目標に盛り込んだ「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が2015年に採択されましたが、これを社会的側面からフォローアップすることも私たちの役割です。国連化する世界の課題をいち早く識別概念化し、世界に向けて発信することで、社会をよりよくできるのはこの仕事の喜びであり、今後も社会的・経済的・環境的に持続可能な開発を根付かせるために尽力していきたいと思えます。

私が社会開発の問題に関心を抱いたのは大学時代の現地の学生と交流を共にしながら世界の課題を考察する、インドネシア交流セミナーに参加したときの衝撃が原点です。水も電気もなく、子供の数だけが多という貧困の過酷な現実が自分の周りだけではなく世界の出来事に目を向けさせ、世の中に役立ちたいという気持ちに発展していったのです。将来、国際機関で働きたいと考える方は、実際に世界を見る機会を持つてください。途上国の現状を知り、それが知識と情熱のつぎは大きな力になります。私はこれまで国連職員として長い経験を積んできましたので、それを若い世代にも伝えたいと考えています。関西学院大学の学生が21世紀の国連本部で学ぶ「国連セミナー」で講師をさせていただきます。この場では女性力が発揮できる本場にも関心を持ち、国連職員として活躍してほしいと思います。



Yasumitsu Ozeki 道券 康充さん
国連開発計画(UNDP)
政策・プログラム支援局 ポリリー・スペシャリスト
1989年 法学部卒業

関西学院大学で
国連職員をめざす道筋が
具体的な形になった

国連開発計画は、世界170カ国以上で活動する国連の開発援助機関です。貧困の撲滅と不平等の削減を目標に、民主的ガバナンスの支援、持続可能な開発の促進、紛争や災害といった危機の予防復興という3つの重点項目を掲げています。私が所属する局は、これらの課題に対する組織全体の政策立案と、開発途上国を支援しているUNDP現地事務所への技術的資金の支援を行っています。中高生の頃から国際問題に対する関心はあったのですが、まだ漠然としたものでした。大学に入ってから、国際社会組織「アイゼック」で活動したときや、国際

関係論の授業を履修したことが、道筋を切り開く大きな契機となりました。この授業を担当されていた先生が国連職員を育成したいという熱意をもっておられたのです。さらに、外交史の研究に励んだときも知識や分析能力を磨く上で大切な基盤になりました。このような大学時代に経験した学習んだことがつとより、国連職員になるための具体的な道筋が見えてきました。その意味で、関西学院大学に入っていたことは、今の自分にはなかなと思いません。

母校が2017年に大学院「国連外交コース」を開校し、より高いレベルで国連職員を養成する取り組みを始めることは、卒業生として、また国連で働くものとしても非常に嬉しいことです。これまで培ってきた様々な国際協力の実績をもとにした関西学院大学らしいコースではないでしょうか。国連職員をめざす方には、国際社会が直面する課題への問題意識を持つ、自ら未来を切り開いていく心構えを大事にしてください。様々な困難もありますが、その覚悟があれば、大きなやりがいを実感できる仕事だと思います。



Yoko Shimizu 清水 康子さん
国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)
インテグレーション課長
1983年 経済学部卒業 /
2009年 総合政策研究科 社会政策専攻 博士課程 修了

学問の本質は他者への奉仕
大学で培った価値観が
仕事の土台になっている

国連難民高等弁務官事務所は、各国政府と連携して、難民の国際的な保護支援を担当しています。インド事務所の重要な仕事は、庇護申請者への個別インタビューをし、難民認定をすることです。また、庇護申請者難民のうち自立が難しい個人には生活支援も行います。私はその実施管理のほか、インド政府や他の国連機関ドナー(資金提供国)との協力関係を構築するなどの役割を担っています。難民とは政治的宗教などの理由で身の安全が守れないため自国を去ることができなったり、紛争の激化によりやむを得ず他国に避難したりする人たちです。難民

に接していると国際社会が紛争問題を解決する意志を持つことの重要性は、日本としては平和の大切さを痛感します。日本としては難民問題は脅威でないかもしれませんが、問題意識の先に平和があるはずは、関西学院大学は日本で初めて「難民を対象とする難民人学制度」を設置しました。私はそのような母校を誇りに思います。今の仕事をめざす直接的なきっかけになったのは大学時代に参加したインドネシア交流セミナーでしたが、他にも国際貢献を仕事にする上で大切な授業を授けてくれた大学でした。例えば、各学部で実施されていた「アベスタワー」では宗教的対話だけでなく、経済と人間の関係について学ぶ機会もありました。そのとき学問とは自らの教養にとどまらず、誰かの役に立てばという意味を持つ気がされました。この考えは現在も常に持っています。また、難民の権利だけを主張するのではなく、その権利を実際に行使できるようにさまざまな活動を行うことは事務所の大切な仕事です。学問的な議論だけではなく、実際に行動を起こす姿勢は関西学院大学のスタイル「トップ・ダウン」の「down」からつながっていると思います。特に、今の仕事を始めてから約10年後博士課程に入学したときは実践的な行動を学問的に見直す機会になりました。

